

Mマガジン・サポーター(店舗情報の詳細は「音楽好きな友の会」公式サイトにてご確認ください)

Table listing various music-related services and businesses across different districts like 元住吉, 武蔵小杉, and 東横線沿線.



A Free Magazine that Promotes Regional Revitalization through Music Mマガジン 2021年7月16日号 6月16日発行 (毎月16日発行) 第77号

Large advertisement for '音友レコード倶楽部' (Sound Friends Record Club) featuring a woman playing a flute. Includes text about COVID-19 prevention and club activities.

Interview with jazz pianist 星乃けい (Kei Hoshino). Includes her photo, a quote about her career, and information about her website.

Advertisement for 島倉学ミュージックスクール (Shimazaki Gaku Music School) featuring a female instructor and promotional text.

Advertisement for 島倉学ミュージックスクール (Shimazaki Gaku Music School) focusing on voice training and free trial lessons.

Advertisement for川崎市国際交流センター (Kawasaki International Exchange Center) featuring disaster relief seminars and a lunchtime concert.

Advertisement for 音楽好きな友の会 (Music Lovers' Association) featuring a video about the Sound Friends Record Club and a photo of the group.

連載15 団塊じいのジャケ買い遍歴

演歌と歌謡曲が身体に染み付いている。 神山 昇



▲ラジオで聞いてレコード屋に買いに行った。松島アキラ: 作曲家の渡久地政信にスカウトされ、1961年、ビクターレコードからこの「湖愁」でデビュー、大ヒットした。

自分の音楽のルーツをたどってみると面白い。私の場合、幼い頃からよく聴かれていた叔母の家で流れていた演歌。小学校で習う音楽の楽しさ、3つ年上の兄が弾いていた憧れのギターを見よう見まねで覚えた古賀政男の弾き語り、「影を慕いて」。そんな自分が中学の中頃(1960)だったか、胸に刺さったのが渡久地政信作曲、松島アキラの「湖愁」だった。リズムが非常に解りやすく

哀愁の意味も知らないが寂しい歌などは理解は出来た。これをギターで弾き語りたくて挑戦してみたが根性無しには無理だった。その後、西郷輝彦や安達明の曲が持ち歌になって人前で歌う事に目覚めた。だから、なんだかんだ言っても身体に染み付いているのが私の場合、演歌と歌謡曲なのだ。

もう一つ、ラジオだ。FEN(極東放送網)だ。ここから流れてくる、アメリカの曲である。昼間はほとんどが米軍情報だが夜になるとポップスやジャズが英語のDJによって次から次へと流れてくる。とにかくそれをラジオで流しているのが、かっこいいライフスタイルなのだ。ジュリー・ロンドンの「思い出のサンフランシスコ」や「フライ・ミー・トゥーザ・ムーン」。これらは耳から入る音真似て歌っていた。絶対にアメリカに行くぞ。そう思える美しすぎる曲だった。

高校に入って音楽の時間に、歌のテストがあった。音楽の先生がNHK所属のオペラ歌手だった。試験の後に職員室に呼び出された。担任も不思議な顔で見ていた。「あなたの歌い方、特に音

程の取り方を直さなければならぬ。放課後に残れ」となった。自分は音痴なのだろうか悩んでいた。結局、男子校のあるあるで、ソプラノの部員が少なかったのだ。つまり音楽部に騙されて入部させられた。しかし、我が家は家業を手伝うのが習わした。秋のコンクールのまでの約束で親は許してくれたのだが…。二七部員のような者だから音符など読めやしない。歌う事の難しさ、あまりにも過酷な練習だった。さらに曲がクラシックだ。それも、たしかヴェルディーの「椿姫」の一節だった。高校の神奈川県大会で準優勝だった記憶があるが私が入った事で優勝できなかったのではと密かに思っている。

これらがミックスしているところに、突然ローリングストーンやビートルズが身体を貫くように流れ込んで来た。私に取って60年と70年代は青春真っただ中。頭も悪かったが柔らかかった。アンダーグラウンドなバンドも作ったし、ロックバンドも作った。中原エトピツでコンサートもやった。

音楽は私に取って「No Music, No Life」である。

連載05 島倉 学があなたに贈るミュージカルの世界へ

芸術文化は娯楽ではなく生命の根源である 島倉 学



国立音楽大学音楽科卒。劇団四季出身。クロスオーバー歌手。近年は、クラシック・コンサートのソリストやミュージカルのメインキャストで出演。現在活躍中のプロ歌手をはじめ、有名ミュージカル俳優、ジャズ系Jr.など数多く歌唱指導。ヴォイス・トレーナー歴19年を誇る。島倉学ミュージックスクール代表。劇団SETAアクトースコース歌唱講師。

芸術文化において、「音楽の力」「演劇の力」は無力なのか。いえ、アーティスト自身の弱い精神こそが無力なのです。真のアーティストは、音楽や演劇を通して、自分の全てを他者に捧げることが使命です。それを決して忘れてはなりません。

人間が生きていく上で、絶対に欠かせないものは「衣食住」ですが、芸術文化とはそれを超越するのです。例えば、どんな時かと申しますと人間が「生きる意味」を失った時です。人は自分の寿命を知らされると、目の前にどれだけ大金があろうと「衣食住」は何の生きる支えにもなりません。しかし、「音楽の力」「演劇の力」とはその失った心に栄養を与える存在なのです。つまり、生きる希望と勇気を与えることがその人の生きる活力となる。

これから時代の進歩と共に、芸術文化はどんどん衰退していきます。なぜなら、今や人間がインターネットを利用するのではなく、インターネット(オンライン)に心を支配されている世の中だからです。このままでは、「人間の潜在能力がAI(人工知能)に支配される」そんな恐ろしい世の中になってしまうかも知れません。だからこそ、生で感動を味わえる芸術が貴重であり必要とされる時代になると思われるでしょう?残念ながら、古き良き時代の手法を残していかない限りそうはなりません。そして、何よりも大切なことは質が高く高い技術を持ったアーティストを育てていかなければ、芸術の本質は残っていかないのです。

も尚上演し続けている最高傑作です。そんな作品の中で、ぜひお聴き頂きたい楽曲は「Gold von den Sternen」、邦題は「星から降る金」です。

ストーリーは、1768年ウィーン。ザルツブルクの宮廷楽士である父レオポルト・モーツァルトは、娘ナンネルと共に、「奇跡の子」と呼ばれていた幼い息子ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトの演奏を目の当たりにしていた。歳月は流れ、青年になったヴォルフガングは、故郷ザルツブルクで音楽活動を続けていた。しかし、ヴォルフガングはザルツブルク領主大司教の支配下で、奴隷のように束縛された生活に嫌気がさしていた。父とも意見が衝突し、怒りを爆発させてしまったヴォルフガングは、コロレトからクビを宣告され大司教との決別を宣言した。そして、新しい就職先、自由と名声を求めザルツブルクを出るが、仕事は見つからず母を亡くした。失意の中、帰郷したヴォルフガングは幼少期から彼の才能を見抜いていたヴァルトシュテッテン男爵夫人と出逢う。ヴォルフガングの才能を開花させるためにウィーンへ行くように説得します。そこで歌われるのが、「Gold von den Sternen」です。ヴォルフガングには「生き方」すなわち

「生きることは学びである」として、ヴォルフガングの父へは「愛し方」すなわち「愛するとは自分の幸せのために見返りを求めないこと」を伝えています。



▲モーツァルト/ウィーン盤 ▲モーツァルト/新演出盤

「私この魔法の庭にとどまるのだ!ここが前にも安らぎをえられる場所」「お前を守るために、こうして壁を高く門を閉じたままにしているのだ!」王のその言葉全てが、息子を心から思う真実の「愛」でした。しかし、それでも「僕れ」の心が王子様から離れませんが、「お前はここを去らねばならない」と世界の果てにある星から降りそそぐ金「僕れ」は言う「それを見つけた者は、どんな不可能なことも可能にできる者」「存在するとは成るといふこと」「生きるとは学ぶといふこと」「星から降る金を探るためには、どんな時も危ない橋を一人で渡らねばならないのだ」「愛するとは時に手放すといふこと」「愛するとは時に最愛の者と別れるといふこと」「愛するとは自分の幸せを求めずとえ続け、涙を堪えても相手のために伝えるといふこと」

Gold von den Sternen 歌詞和訳 島倉 学 「遠い遠い昔のお話です...あるお城に王様とその息子の王子様が暮らしていました」そこはまるで魔法の庭に包まれたお城でした。年老いた王様は、世の中に失望し、城の壁を高く門を閉ざしました。その時、王は息子にこう言いました「お前にとって、ここは夢の国、ここに勝る場所はない!」しかし「僕れ」の心が王子様に聞こえてくるのです「お前は、ここから旅立たなければならない!」※夜空の星から時折降ってくる金「僕れ」は言う「お前なら外の世界へ出て、誰にも頼らずその金を探し出せよう!」「存在するとは成るといふこと」「生きるとは学ぶといふこと」「星から降る金を探るためには、どんな時も危ない橋を一人で渡らねばならないのだ」王は息子にこう言いました「外の世界に出れば、お前はきっと挫折する...この私のように...」

特別寄稿 Music Conversations 音友レコード倶楽部・音楽談義 SF(空想科学)小説をモチーフとした音楽のお話し 藤田 順治

今回は昨年までペンネームとして使用していたフレドリック・ジョーンズの名前の由来から話を進めていこうと思います。ジョーンズという名前はジャズ・ミュージシャンにおいてクインシー・ジョーンズ(Tp.Arr)やジョーンズ3兄弟(ハンク(P)、サド(Tp)、エルヴィン(Dr))などポピュラーな名前ですが、フレドリックの由来は何だっただろうとふと考えてしまいました。振り返ってみると中学のクラスメイトにSF好きな友人がおり、その影響でフレドリック・ブラウンというショートショートの名作家の作品を読むようになりました。この人は「未来世界から来た男」、「火星人ゴッホ」などのSF作品を残しています。という事で今回はSFに関連した3枚のアルバムを紹介していこうと思います。

小説名からとったものであり、達郎氏がこの作品に感銘を受け、小説にちなんだ曲を作り上げました。つい最近、山崎賢人氏主演で映画も公開予定ですが、大まかならすじとしては主人公が生活に絶望し冷凍睡眠により未来へ行き、またタイムマシンで今度は過去に遡り、人生をやり直すという話です。そして曲はというと達郎氏が得意とする軽快なバラードソングに仕上がっています。

次はデヴィッド・マシューズの「Dune (テン/砂の惑星)」(写真②)。これもフランク・ハーバートのSF小説をモチーフにした作品でデヴィッド・リンチ監督の映画公開の7年前に既にLPアルバムを発表しています。当時マシューズはポップ・ジェームズ(P)やテオダート(Key)と同様にCTレールでアレンジを任されていました。A面全部を使用し、4つのパート(「惑星アラキス」~「救世主ムアド・ティバ」)から成る壮大な組曲をエリック・ゲイル(G)やランディ・ブレックナー(Tp)などのミュージシャン・シーンで活躍していた錚々たるメンバーを起用し制作されています。原作内容は遙か未来にお

ける砂でおおわれ帝国直轄領の惑星アラキスにおいて帝国に追われたアトレイデ公爵家子息のポールが砂漠に逃れて超能力と己の使命に目覚め、砂漠の先住民の救世主となって、世界を根拠から変革する戦いに立ち上がるという内容です。

最後はメイナード・ファーガソンの「Conquistador(征服者)」(写真③)。この中で3曲目に入っている「スター・トレックのテーマ」は元々、アメリカの人気SFテレビドラマシリーズ「スター・トレック」(後に映画でもシリーズ化)で使用されていたメイン・テーマです。毎回、カーク船長率いる宇宙船エンタープライズ号の乗組員の活躍が放映されていました。また、日本テレビの「アメリカ横断ウルトラクイズ」のテーマソングでも使用されていたので昔、聴いた事のある馴染み深い曲だと思われま。ファーガソン得意のトランペットのハイノート・サウンドが随所で聴かれ、このアルバムは当時の全米ジャズアルバム第1位にもなった様です。

今回はSFに関連する小説やTVドラマをモチーフにした音楽を挙げてきましたが、興味を持った作品等があればこの機会に原作と同時に音楽アルバムと一緒に鑑賞するのはいかがでしょうか。



▲① Ride On Time/山下達郎 ▲② Dune/ David Matthews ▲③ Conquistador/ Maynard Ferguson

特別寄稿 2枚のライブ盤にまつわる話 その2 大場アキヒロ

前号で1959年5月、フロリダ州マイアミで開催された第2回ディスク・ジョッキー・コンベンションでのライブ盤2枚をご紹介した。今号もその続きとなるが、レコード、CDをお持ちでなくてもYouTubeにアップされているので、是非聴きながらご一読を。今回はこの2枚のライブ盤の裏側を少し掘り下げてみたい。「Beauty and the Beat! / ベギー・リー&ジョージ・シアリング」(写真①) ベギー・リー&ジョージ・シアリングのステージは本番前に丸1日、充分なリハーサルを行い、本番は非常にリラックスしたステージとなり、リーにとってもシアリングにとっても代表作のひとつとなった。オリジナルLPアルバムは'59年8月にリリースされ、'87年にCD化された。CD化の際、2曲のボーナストラックが追加されたのだが、不思議なことにそれには拍手やアナウンスが入っていないのだ。まるでスタジオ録音なのだ。そう、このアルバムは元々全編スタジオ録音で、拍手やアナウンスは後でオーバーダビングされたものなのだ。ライブが行われたのは事実だが、当日、録音シ

ステムのトラブルがあり、収録できなかったのが真相らしい。しかし出来上がったアルバムを聴くと、とても作られたライブ盤とは思えないほど自然なライブ・ステージが収録されている。ちなみに2002年、東芝EMIはこのアルバムのスタジオ録音部分のみでCDをリリースした。「Breakfast Dance and Barbecue / カウント・ベイシー楽団」(写真②) 当時、ベイシー楽団はニューヨークの名門ジャズクラブ「バードランド」に出演しており、5月31日も通常とおり、バードランドでのステージをこなしていた。ライブ終了後、その足ではるか南のマイアミまで飛行機で数時間かけて移動し、ディスクジョッキー・コンベンションでのステージを務めた。このアルバムを最初に手にした時、なんで「Breakfast Dance ~」のタイトルなのだろうと思ったが、ライブのスタートが深夜で、翌朝にかけて行われたことからだと後で理解した。かなりの強行軍だが、コンベンションの聴衆は耳の肥えた人ばかり。ベイシー

楽団にとっては必然的に気合いが入ろうというもので、3セット、全25曲をいつもと通りのリラックスした演奏で聴衆を楽しませた。ちなみにコンベンションでのライブ終了後、日中にニューヨークへ戻り、その日の夜のバードランドのステージもこなしたとのことである。ライブ盤はなんといってもその臨場感であり、聴衆の反応が演奏をさらに盛り上げ、スタジオ録音にはないライブ演奏ならではの熱の高さが魅力である。ジャズのアルバムには以前からライブ盤は多いが、世の中がレコードからCDに移ってから未発表のライブ音源のCD化などライブ盤のリリースがさらに増えたように思える。好きなアーティストのライブ盤を探してみるのも楽しいかも。



▲① Beauty And The Beat! / Peggy Lee & George Shearing ▲② Breakfast Dance and Barbecue / Count Basie

連載-Take 3 そして場所探しが始まった。 塚田 親一

「とある飲食店」が閉店になり、自分たちでレコードが聴ける場所を造れば、みんなで聴く会「音楽好きな友の会(音友会)」を発足。簡単に発足したが、聴ける場所探しが大変であった。音楽好きなオーナー、オーディオシステムが常設、ある程度の広さ、特にレコードプレーヤーが無くてはレコードは聴けない。川崎さんと元住吉中を探したが近年そんな場所はない。会場があればオーディオ機材は私物でも何とかなる。ではと最低15名くらいの席がありオーディオが無ければ置かせて貰える会場を探した。西口のオズ商店街に小

さな喫茶店が快くOKが貰えた。アンプ、スピーカー、レコードプレーヤーを置かせて貰い参加費を設定し会場費に充てた。珈琲付きで月2回の日曜日、ジャズと軽音楽の日を設定、開催中の出入り自由、で開催。その後に難題が発生。開催中ポスター掲示はあるが「出入り自由」とは言葉、コンサート参加以外のお客さんの対応である。日曜日にゆっくりお茶を飲みに来たのに開催中の時間には参加費が発生?。オーナーも当初は気がつかなかったが、お客さんからしてみれば余計な音楽が流れ好き嫌いにかかわらず出費がある。

結局開催の2時間を全貸し切りにして貰う事になった。確かに静かに読書をしよと来たのに音楽が大きく落ち着かない。レコードコンサートは一般のお客さんに迷惑を掛けてしまった出発であった。でもとても嬉しいことがあった。女性の常連の方がレコードが聴けるならと、わざわざ友人と星野源のLP盤を購入し、聴きたいと持参してくれた事でした。こんな一般の方がわざわざ購入して持参してくれた事は音友会の励みになりました。(Mマガジン2015年09月号で紹介)

連載58 「くじら座」日記 ひとこえ 牧野ケント

とっくの昔に気づいていた。夢を持つことは綺麗な事だけではなく、むしろ苦悩が大半を占めている。寝て見る夢とは違い、本気で理想に向かって進む道は、想像していたよりも孤独の時間が殆どだ。人から気付かれない地道な練習や、頭を抱えたいくなるような、ストレス度の高い知識習得の繰り返しと言える。脚光を浴びる時間は、それらがや々と実を結ぶ瞬間であり、一瞬だ。脚光どころか、パフォーマンスに向けられる視線や、「興味なし」の目線もある。良いライブができたと思った日も、芳しくなかったライブの日も、帰りに見上げる夜空は総じて悔しい。スポーツ選手の、「チームは勝たれど自分のプレーには納得できなくて、そんな想

いに近いのだろうか。本気とは、試行錯誤の連続を意味する。同級生と会うたびに、「打ち込めるものがあって羨ましい」と言われる回数も増えた。「夢を持ってしまったばかりに」僕にとっては、そう感じる夜もあつた。物事には表と裏がある。目に見える部分だけがすべてではない。しかし、それこそが表現の世界の醍醐味だ。苦悩があるから表現が続く。満足された日々からは、心に訴える表現が生まれない。悩んで、不安になって、もがく道のりだから、ファン、共感、応援の声に本当に救われる。言葉以上に、応援は嬉しいものだ。

先日、ひとけのない公園でギターを弾いていたら、通りすがり小学生が僕を見ていた。僕に話しかけようかどうか迷っている姿を見て、懐かしい気持ちになった。小さな一声が嬉しい。勇気を出してくれてありがとう。僕も、「その一歩」を常に踏み出すことのできるミュージシャンでいたい。



連載39 Course: Addicted to Guitar 単音カッティング(ミュート)その2 永瀬 晋

お世話になっております。今月もまたギターを始めたばかりの方にお勧めなギター小ネタをソウリーヴ・ミュージック・スクール永瀬がお送りいたします。今回も前回に続きファンク系テクニック「カッティング(ミュート)」のご紹介。早速譜例の紹介になりますが、今回のフレーズは単音と復音のコンビネー

ションフレーズになります。左手で押さえる指が増えるとミュートがかなり大変になりますが、こういったフレーズは左手親指が大活躍しますね。ミュートの担当範囲としては「低音弦(6,5弦)が親指担当、高音弦側は親指以外の空いている指で担当」という形になり、コツのイメージは「指で弦にさわ(触れるだけで押さえない)」というのが非常に重要になります。

カッティングのテクニックを習得する際はとにかくミュートが重要になりますが、ディストーションをかけたりしますと更に難易度が上がります。カッティングを極めるにはまずは「ミュート」を極めていくのが肝心です。今回は結構大変なフレーズですが、是非チャレンジしてみてくださいませ。ではまた次回!



ソウリーヴ・ミュージック・スクール Souleave Music School http://souleave-music.com/ 元住吉駅徒歩3分、武蔵小杉駅徒歩13分 チケット制 音楽教室 Tel 044-750-8992 AM8:00 / PM22:00start 地域の、全国のミュージシャン、そして音楽活動に関わるあらゆる人をネットワークしたい。演奏の場を創り、ライブと楽曲の発信活動を後押ししていくことが目的です。元住吉から世界に向けて配信して行きます。アーティストメンバー募集中!! 現在、登録アーティストメンバーが演奏動画を配信しています。演奏者の方々で「モットンクラブ」から配信希望の演奏動画を募集しています。(近郊で企画、運営可能なスタッフメンバーを募集中です)

